
流れ星

景雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ星

【著者名】

景雪

【著者名】

N Z ハード

【あらすじ】

リチャードはアメリカ西海岸で暮らす、90を超えた老人。ある日、孫のマイクが、まだ父親のエドワードにも紹介していない日本人のファインセを連れて来る。マイクが真っ先に彼女を紹介しようとしたのは、リチャードがかつての戦争で、日本人と戦った経験を持つているからだった

祖父と孫

「グランパ。紹介したい人がいるんだ」

孫のマイクは高い声が良く通る。リチャードはロッキングチェアに深く腰を掛けながら、長年腕でこすられてすり減ったひじ掛けをゆっくりなでる。

「エドにはもう紹介してあるのか？」

父親、エドワードの名前を聞き、マイクはつづむじて何も言葉を発することができない。結婚相手を紹介するならまずはエドだろう。そう思つたがリチャードは言葉にしなかつた。マイクが敢えて一番に自分のところに来たのは、何か理由があつてのことだと思つたらだ。

「ファインセカ」

「……うん」

すぐに返事をしないのは、後ろめたい何かがあるのだろう。エドよりも先に私に紹介しようと思つたのもそのためだろうか。リチャードはロッキングチェアを揺らしながら思つた。

「連れて來い。いるんだろう？ 玄関の外に」

「……うん」

マイクはゆっくり後ずさりすると、玄関の外に消えていった。玄関の戸が開いて一瞬、外の光が田をくらませ、リチャードは長く伸びた眉毛で瞳を閉ざすように眩さを防いだ。近所に住んでいふといえ、早起きが苦手なマイクが午前中に訪ねて来ることは珍しい。リチャードは陽がほとんど入り込まない部屋の、分厚い暗がりにぼんやりと視線を合わせていた。そういうふしていると再び戸が開き、光がすっと差し込み、光の帯は段々と太くなつていつた。部屋にこもつていた埃が舞い、それが照らされ細かい粒となつて漂つた。

「グランパ。ミス・ヤマダだ」

「はじめまして。キヨウコ・ヤマダです」

リチャードは皺の深く刻まれた瞼をほとんど横一線に閉じ、突然飛び込んできた外界の明かりに視野を奪われてしまったが、「ヤマダ」というファミリーネームと、訛りの強い英語はしっかりと聞き取ることができた。

「グランパ。彼女は日本人だ。だからグランパに最初に紹介したかつたんだ」

緊張している時、マイクは高い声が一層高くなる。リチャードはまだぼんやりとしか見えない視界に二人の人影を捉え、眼球を包み込むように三回強く瞬きをした。

「グランパが戦争で日本人と殺し合ったことは知ってる。でももう昔とは違うんだ。彼女には何の罪もない」

やつと焦点が定まりリチャードの瞳に、細身で髪の長い東洋人の女が映った。自分の居場所を探せずにいるのか、いつになく饒舌なマイクとは対照的に、彼女はうつむいてじっと黙っている。

「彼女は、ロマリンダ大学の同級生なんだ。グランパの後輩だよ」そこまで聞いて、リチャードはおもむろに立ち上がった。口を開こうとした瞬間にリチャードが日本人のフイアンセに怒っているものと思いつ、マイクは慌てて次から次に様々な言葉をかけた。けれど祖父は黙つたままで、二人の姿が見えないのかまっすぐに家の外に向かつた。ミス・ヤマダは高齢の割に大柄なりチャードを、後ずさりして大げさによけた。

「グランパ。聞いてくれよ」

マイクを右の掌で制し、リチャードは言った。

「マイク。ミス・ヤマダ。時間はあるか？ ちょっと行きたいところがある

「え？」

「時間がかかるぞ。いいか？」

「うん……夏休みだから時間はあるよ

マイクは短く返事をし、ミス・ヤマダも遠慮がちに頭を縦に振つ

た。

リチャードは同じように口を開けたまま彼を見つめる一人を尻目に、九十を過ぎても衰えない足取りで海岸に向けて歩く。真夏の西海岸は雲が多いが、切れ目からは薄く気持ちの良い青が覗いて好天を告げていた。

「グランパ。どこに行くんだい？」

「後で話す。とりあえず船に乗れ

「え。クルーザーで行くのかい？」

「船に乗られるんですか？」

ミス・ヤマダの問いかけにリチャードは答えない。代わりにマイクが答えてくれることが良く分かっているからだ。

「グランパは若い頃からずっと船に乗つていいんだ。世界一周もしたことがあるんだよ」

「すごい

「今じゃ年寄りの道楽だ。食料と飲み物を積もう

最初からそう決まっていたかのように、三人は分担して準備を進め、まだ太陽がてっぺんまで昇る前に西海岸を発った。

海は濃く、緑と青を凝縮していた。徐々に離れていく西海岸の街並みは、山肌のように密集した建物の所々に高いビルが突き出て見えた。

「どこに行くの？ ハワイ？」

「焦るな。長い船旅になる」

操縦席でハンドルを繰るリチャードの斜め後ろにマイクが立ち、すぐ後ろの席にミス・ヤマダが腰をかけた。リチャードの操縦は的確で、六十年培つた経験は皺の一本一本にまで染み込んでいる。街が見えなくなつてから、リチャードはゆっくりと口を開いた。

彼の操縦に安心したのか、マイクもミス・ヤマダの隣に座つていた。

「マイク。わしが戦争に行つた時の話をしたことはなかつたな？」

「……うん」

てっぺんまで昇つた太陽は強烈な日差しを海面に注ぎ、照り返し

が操縦席の窓から時折入りこんだ。リチャードはサングラスのつるを握つて位置を直した。

「あら。随分古い聖書」

ミス・ヤマダが彼女の側に置いてあつた聖書を見つけて手に取つた。背の部分が崩れそうに古い物で、表紙にはくすんだ染みができていた。

「それはグランパがいつも大切にしている聖書だよ。美人のシスターにでももらつたんじゃないの？」

そう言って笑うマイクの声など少しも気にせず、リチャードは船の進行方向を見据えたまま一人に言った。

「ちょっと長くなるが、退屈しのぎに聞いてくれるか？ 勿論、ミス・ヤマダも」

二人は「うん」「はい」と同時に返事をした。それを聞いてリチャードは乾いた唇を舌の先で湿らし、数秒の間を置いて話し始めた。

カズオ・タニグチ

リチャードが生まれた南カリフォルニアは当時急速に発展していたロサンゼルス、サンディエゴ、サンフランシスコといった大都市を有し、人口の増加に伴い医療機関の充実、医師の増加が求められていた。リチャードがロマリンダ大学で医学を専攻することになったきっかけはまさに、そういうた需要に応え、医師として州に貢献したいと思ったからだつた。カリフォルニアは合衆国で一番大きな州だから、外国から学びに来ている学生も多かつた。カズオ・タニグチも日本から留学に来ている学生だつた。

丸顔でいつも眼鏡をかけているカズオは、あまり口数が多くはないが、かつたが眞面目な学生で、敬虔なクリスチヤンでもあつた。彼は進んだ医療技術を習得し、祖国に還元するためにアメリカに来ていた。韓国の併合、満州国の建国、急速に中国での利権を拡大している日本を、リチャードは快く思つていなかつた。であるからカズオに最初会つた時も、眼鏡の奥にひつそりと覗く彼の目の細さを、侮辱の気持ちでもつて一瞥した。リチャードの肩ほどしかない背の高さ、長い胴と短い手足も、自らが生まれ持つた血筋に優越感を抱くのに十分だつた。

リチャードはポールという背の高い同級生と仲が良かつた。ポールは男前で口が上手かつたから、いつもガールフレンドと一緒にいた。ポールは表面上、気さくで良い男だつたが、強い酒で女を酔わせていたずらをするようなこともあり、あまり素行は良くなかつた。ある日、リチャードとポールは同じ学部の女学生二人を誘つて地下の酒場で酒を飲んだ。女学生の内の一人がコリコ・マツオカといふ日本から来ている学生で、ポールは最初から彼女に目をつけていた。「ジャップの野郎は嫌いだが、女は特別だ。どんな物が付いているか、一度確かめるのも良いだろう?」それがポールの口癖だつた。リチャードは積極的に彼に加担しようとは思えなかつたが、だ

からといって日本人の女に同情する気もなかつた。

ここで飲む物は任せてくれと、ポールは甘くて飲みやすく、アルコール度数の高い酒ばかりを一人の女に飲ませた。どこからどうやつて引っ張り出してきたのか、次から次に出てくるポールの話に一人の女学生は引き込まれ、お代わりを頼むまでの時間が目に見えて短縮された。五杯も飲むと一人の女は千鳥足になってしまい、当初の目的通りにポールはミス・マツオカの肩を抱きながら先に店を出て行つた。リチャードはもう一人の決して美しいとは言えない白人女を成り行き上仕方なく連れて歩くことになった。白人女は、彼女の実家で飼っている肉牛の筋肉が逞しいことを、通行人が顔をしかめて振り返るほどの大聲で延々と語り続けた。元からほんの少しも興味がなかつたので、リチャードは彼女をタクシーにほとんど押し込んで家に帰し、また夜のビジーストリートを目的もなく歩いた。すれ違う男たちは何故だか軍隊に身を置いているらしい服装の者が多く、リチャードはその顔を見る度に唾を吐きかけてやりたい衝動にかられた。リチャードが最も嫌う職業が軍人だった。危険に身を晒しているという自己陶酔からか、軍人以外の人間の前で必要以上に横柄になる態度が気にくわなかつた。

適当に目についたバーで安酒をあおり、無駄に時間を費やしていくと、もうとっくに深夜だというのに何やら騒がしい声がしたのでリチャードは表の通りに出た。なんとそこには人ごみに囲まれて対峙するポールとカズオ・タニグチがいた。二人は汚い言葉を投げながら罵倒し合い、今にも格闘を始めんとしている。周りを囲むがらの悪い者たちがさかんに煽り、ほとんどの者が「やつちまえ！」とか「ジャップを殺せ！」とかポールを味方している。六フィートを優に超えるポールと五フィートと少しのカズオ・タニグチが向かい合えば、周りが応援しなくとも勝負の結果は決まりきつているように思えた。

「何故ミス・マツオカを傷つけた！」

「彼女の方から誘つてきたんだ」

「ふざけるな！　日本では結婚前の女子は貞操を守るんだ！」

「ここはアメリカだぞ！　黄色い猿が！」

カズオ・タニグチは“黄色い猿”という台詞が許せなかつたのか、勢いをつけてポールの方向に踏み込んだ。ギャラリーが拳を突き上げて「やれ！」「いいぞ！」と叫ぶ。ポールが狙いを定めて右の拳を突き出す。カズオ・タニグチはポールの拳を俊敏な動作でもつてかわし、拳が空を切つてのけぞつたポールの懷に入ると、姿勢を低くして腰の上に器用に彼の大きな身体を乗せ、回転させて投げ飛ばした。背中から石の地面に叩きつけられたポールは、声も出せないのか顎を大きく突き出して息だけを荒く何回も吐いた。

「今度、彼女に同じことをしてみろ。一度と女を抱けないようにしてやるからな！」

カズオ・タニグチはそれだけ言い残して革靴を打ち付ける音を響かせながら去つていった。あれほど興奮していたギャラリーは体温が一度も一度も急激に下がつたのか、どうでもいい捨て台詞を口々につぶやきながら散らばつていった。物静かな姿しか知らないカズオ・タニグチの、感情を沸騰させる様をリチャードはすぐにそのまま受け入れることができなかつた。涼しさが多く含まれるようになつた九月の夜風に、上着の半袖から出たままの肌を吹かれ続け、リチャードは身振るいを一つした。

翌日、まだ痛むのか背中を丸めながら登校したポールに会い、リチャードは昨日の顛末を聞いて驚愕と言つよりはあやうく噴き出しそうになつた。

「ミス・マツオカのアパートに行つて、ベッドに押し倒したら股間を思いつきり蹴り上げられたんだ。更に彼女は日本のカタナを抜こうとするんで、俺は股間を押さえながら慌ててアパートの外に出で、カズオ・タニグチにばつたり会つてしまつた」

「災難だなあ。お前」

「人ごとだと思って……」

リチャードとポールがそんな会話をしながらキャンパス内を歩い

ていると、向かいからカズオ・タニグチとミス・マツオカが並んで近付いてくるのに気付いた。ポールは咄嗟に身体を横に向かって進行方向を変えようとしたが、リチャードは彼の太い腕をつかんで元の位置に強引に引き戻した。

「やあ。クラスメイト」

カズオ・タニグチはポールに向けて右の掌を差し出した。ポールは視点をどこに定めれば良いのか戸惑っている風だったが、リチャードが膝で軽く小突くとその掌を取った。二人はお互いの掌をつかみ、二回強く上下に振った。ポールははにかんでいるのかしかめつ面をしているのかすぐには分からぬ表情をしていたが、カズオ・タニグチは歯並びの良い前歯を覗かせながら明らかに笑顔と分かる顔を見せていた。リチャードはその時初めて、日本人に対し人間として接することができるような気がした。

ポールはカズオ・タニグチに柔道を習つた。柔道は重心が低く腰から下が短い東洋人の方が上達しやすい。しかしポールは生まれ持つた抜群の運動神経で地道に技を磨いていった。得意技は“ハライゴシ”だとポールは得意気だった。「マイリマシタ」「オネガイシマス」ポールが覚えた最初の日本語はこの二つだった。

リチャードとポールはカズオ・タニグチのことを“カズ”と呼ぶようになった。リチャード、ポール、ポールのガールフレンド、カズとミス・マツオカは五人で付き合うようになつた。ポールのガールフレンドは度々変わつたし、リチャードは余りそういう相手を作らなかつたから何とも妙な集まりではあつたが、少なくともポールのガールフレンド以外の四人は少しも気にしなかつた。リチャードは、カズの話してくれる“ニッコウ”に強い関心を抱いた。カズは日本の“トチギケン”という地方の生まれで、ニッコウは彼の故郷に近い場所にあるといつ。一百七十年平安な時代を保つたその最初のサムライを祀つてあるのがニッコウだとカズは言つた。寺があり、神社があり、雪を抱く山があるニッコウを、リチャードは幾度となく頭の中で描いた。国全体の歴史が百五十年を少し超したばかりのアメリカに生まれたりチャードは、たつた一つの時代が一百七年もある日本という国家に対し、抽象的な魅力を感じたがそれを言葉で表現することはできなかつた。リチャードは必ずニッコウに行くことを決めた。サムライの靈に手を合わせることで、抽象的だつた魅力が具体的になる気がしたからだ。

カズとミス・マツオカが結婚したのは、リチャード達がカリリフォルニア州の医師になつて三年後のことだつた。一九三七年の日中戦争勃発で日本は世界的に中国侵略を非難され、一九三九年初頭には日米通商航海条約が失効した。しかしリチャードは自分達だけが日米間の軋轢とは無縁の場所にいる気がしていた。戦争がすぐそこま

で忍び寄つてきているようには少しも思えなかつた。

カズとミス・マツオカの結婚パーティーは派手ではなかつたが、二人を祝う友人の多さはカズとミス・マツオカの人柄を物語ついて、リチャードにとつてもポールにとつても忘れられない一夜になつた。普段は酒に対して自制できるリチャードは、飲むピッチを上げ過ぎ、酔いを覚ますためにパーティー会場の外で夜風に当たつていた。

「ディック。随分飲んだな？」

リチャードは友人の間でディックと呼ばれていた。

「へイ。カズ。はしゃぎ過ぎたよ」

目の前の人気が見えているのに、その話している声が良く聞こえない体験は初めてだつた。普段は余り飲まないウオッカを五杯も飲んだせいだと、うつろな脳でもつてリチャードは思考した。

「来年、日本に帰ろうと思つ」

カズが言つた短めの一言が、現実の物なのか夢なのか、アルコールに程良く犯されたリチャードはすぐに判別できなかつた。カズはリチャードの反応を待つてゐるよう、人通りが減つたウィークエンドのビジーストリートに敷かれた石畳を見つめていたが、おもむろに続けた。

「子供が大きくなるまでは、日本で育てたい。そしてまたアメリカに戻つてくるよ」

ミス・マツオカのお腹には、来年生まれてくる一人の子供がまだほんの小さい姿で生きていた。

「ニッコウを、案内してくれ」

「勿論。いいよ」

「俺は“アリガトウゴザイマス”と“ゴメンナサイ”しか言えない。君がいなかつたら日本で迷子になつてしまつ」

「ああ。日光は秋か冬がいい。橙や赤に色づいた山々は美しいし、雪で白く染まつた姿もまた良い」

リチャードがうんうんと大げさにうなずいていると、夜空を見上げ

ていたカズが言つた。

「見てみろよ。流れ星だ」

「え？」

「ほら。ああ、見えなくなつた」

「どこだ？ 星なんて出でているか？」

「飲み過ぎだぞ」

カズの言葉に応えるようにリチャードは、決して大きくはないが筋骨がたくましいカズの肩に腕をまわし、普段より高い声を出して笑つた。酒臭い息にカズは多少腰を引く素振りを見せたが、しかしすぐに返答の代わりにリチャードの腰を腕で叩いた。

ポールに最初に伝えたら大騒ぎされると思ったのだろう。帰国することをカズが最初に自分に伝えた理由がリチャードには分かつていた。学生の頃に比べれば不定期ではあるが、ポールは相変わらずカズを師範として柔道を習つていた。

カズが日本に帰つてしまふことを知ると、ポールは氣の毒になるくらい狼狽した。リチャードが間に入つても少しも効果がなく、ポールは大きな身体を揺すつて泣き始めてしまつた。ミス・マツオカ カズのワифになつたのだからミセス・タニグチ、もしくはユリコが正しいが はもらい泣きをし、カズは何かを堪えているのか、薄い唇を固く横一文字に閉じて微動だにしなかつた。

海上はどこまでも穏やかで優しかった。餌でもくれると思つたのか、たまに海鳥が気まぐれでクルーザーに近付いてきたが、期待が無駄だと分かつてすぐに飛び去つていった。

「カズとコリコ。グランパの良い友人だつたんだね」

マイクは祖父の話をこんなに長く聞いたことがなかつた。リチャードの話す口調の端々にあらゆる感情がぎつしりと込められているのを感じ、マイクは背中に冷水をたらされ続けるような妙な感覚を抱いた。

「素敵ですね」

ミス・ヤマダは短くそれだけ口にしたが、彼女の丸い瞳が水をためたように輝いているのを見て、祖父の前だといふのにマイクはもう少しで彼女を抱きしめてしまいそうになつた。

「ミス・ヤマダ。まだ先は長い。奥で休んでいなさい」

「ありがとう。ティック。でももう少し、お話を聞きたいわ」

「起きたら聞かせてあげよう。ゆっくり寝てもまだ十分話してあげられるくらい長い航海になる」

「分かったわ」

ミス・ヤマダはそう言つと素直に船内に降りて行つたが、「二人でお話進めないでね！」と念を押すのを忘れなかつた。マイクは運転を交代するためにリチャードの脇に立つ。水平線に接する直前の太陽は、緩やかな波間の上に、輝く皺を幾重にも作つていた。

「グランパ。まさかカズとユリコに会わせてくれるの？」

ほとんど真横に立つてマイクがリチャードの顔を覗きこむように言った。リチャードは答えずにただ黙つてクルーザーの進行方向を見つめていた。リチャードの横顔は、弱い炎のような夕日に照らされ、温度のある光と影を作つていた。

目が覚めると、何もない海のはるか遠くに太陽が見えた。まだ落日していないのだろうか。そう思つて腕時計を確認し、マイクは既に朝が訪れたことを知つた。リチャードがかけてくれたのだろう、毛布を慌てて払つて立ち上がり、マイクは操縦席に少しも変わらずに立ち続いているリチャードに声をかけた。

「グランパ。ごめん。寝ちゃったよ。代わるよ」

「休み休み運転したから問題ない。穏やかな朝だな」

海鳥が数羽鳴く声が雲の切れ間に広がつた。朝日は周りの雲を次々に自分の色に染めていき、船は徐々に朝の明るさに包まれていつた。リチャードはマイクと操縦を代わり、操縦席に近い場所に腰を下ろした。

「グランパ。方向は合っているの？」

船舶免許を取得したばかりのマイクが海図から現在地を何とか割り出しながら聞いたが、リチャードは座つたまますぐに眠りに落ちたのか返事はなかつた。マイクは海図に描かれた矢印通りに舵を保つた。矢印の先はまだ未記入であり、目的地がどこであるかは分からなかつた。

「おはよう

ほつれた髪を指でときながらミス・ヤマダが顔を出すと、大して眠つていないのにリチャードは起き上がつた。「グランパ。寝ていいよ」「ああ。休んでいるから平気だ」そんなやり取りをしている一人にミス・ヤマダが加わり、マイクは電氣で沸かしたコーヒーを彼女に勧めた。太平洋の真つただ中で迎える朝は真夏とはいえ肌寒く、ミス・ヤマダは舌が焼けるようなコーヒーを有難がつた。彼女は両手ではさみ込むようにマグカップを持ち、熱を少しでも体内に取り入れようとしていた。太陽が水平線から離れ、空の明るさが早朝のそれではなくなつてから、ミス・ヤマダは十分体温が上がつたのか口を開いた。

「ディック。あの古い聖書、何か書いてあつた

それを聞くとリチャードは閉じていた瞼を短く痙攣させるように反応を示したが、瞼は開けなかつた。舵を握るマイクが横目でリチャードを見た。

「日本語で、日記のような内容だった」

「リチャードは扉を閉じたままだ。

「随分古い日本語で全部は読めなかつたけど、多分カズが書いたものだと思う。違う?」

音も立てずにリチャードは扉を開けた。しばらくミス・ヤマダの黒い瞳を見つめ、彼女の問いかけには答えずに話し始めた。

* * *

カズとゴリコが日本に帰つてからすぐに、世界を取り巻く空氣はどうんどうん重く息苦しくなつていつた。ヨーロッパではドイツがポーランドを攻め、パリが陥落した。アジアでは日本が仮領インドシナに侵攻し、石油の輸出停止など諸外国から日本は追い詰められていつた。アメリカは不干渉主義を貫きそのどちらにも積極的に関わろうとはしなかつたが、これ以上不干渉を続けることはできない、といつところまで来てしまつたのが一九四一年だつた。リチャードはポールを誘つて行きつけの酒場に行つたが、その日は酒が腐つているのかと疑うほど全く酔えなかつた。

「ディック」

「ああ」

「俺は、軍隊に行こうと思つ」

「日の日誘つたのはリチャードの方であつたが、実は彼も軍医になることを決心していた。ポールに先に言われてしまつたことになる。

「実は俺も、軍隊に行こうと思つ」

「そうか」

二人はしばらく見つめ合ひ、右の掌を握り合つた。リチャードは、あれ程軍隊が嫌いだつた自分の急激な変化に戸惑つっていたが、ポー

ルも同じことを考えていたかと思うと、戸惑いはだいぶ薄らいだ。二人は、ドイツ軍が破竹の快進撃を続けるヨーロッパのどこかに行くのだろうかと想像した。一度だけ旅行したことのあるパリの街並みがどう変わつてしまつたかに想いを馳せると、リチャードは気分が沈んでしまい酔えない安酒を更にあおつた。

「カズ、どうしているかな？」

ポールのその言葉は沈んだ気分を払い去ってくれた。

「元気にやつているだろうよ。彼は日本人だ。日本にいれば安全だ」

カズがアメリカに残っていたら……リチャードはアメリカ国内の日系人が追いやられている立場を思い、そう言った。

「そうだな。ユリコも元気にやつているだろ？」

カズが祖国に帰国した翌年、子供が生まれたことを知らせるハガキがリチャード達に届いたが、それつきり便りは途絶えていた。“ニッコウ”を案内してもらうのはまだ先になつてしまふかもしれない。リチャードは氷が溶けて上澄みが薄くなつてしまつたバーボンのグラスを見つめながらぼんやり思った。

リチャードはポールと同じ養成機関で軍医になる訓練を受けた。軍隊特有の厳しさや理不尽さはそれほど経験しなかつた。軍医という特別な役職という理由だけではなく、軍隊に属する人間を一人でも多く作り出さなければならない切迫した状況を如実に表していた。やがて日本が真珠湾を攻撃しアメリカは第二次世界大戦に参戦した。アメリカに住む多くの日系人が強制収容所に入れられ、日本は本格的にアメリカの敵になつた。リチャードとポールは訓練の間にカズやユリコについて話すことがあつたが、他の誰にも聞かれないよう小声で話さなければならいくらい、米日関係は悪化していた。

「カズも軍医になつていたりしてな」

「ユリコも軍医で仲良く夫婦軍医か」

二人はからうじて冗談を言い合つ余裕は持ち合っていたが、ヨーロッパでのドイツの勢いと太平洋での日本の勢いは共に止まらず、心の決して一部分とは言い切れない領域に焦燥と不安と落ち着きのなさを抱かずにはいられなかつた。アメリカ西海岸には日本軍が上陸するという出所がない情報が度々飛び交い、国民は精神的に疲弊させられていつた。日本軍は英領香港、英領シンガポール、蘭領インドシナ、米領フィリピンを占領し、太平洋の多くの地域に日の丸が翻つた。アリューシャン列島のアツ・キスカ両島も日本軍に占領され、両島はアメリカ領であることがほとんど知られていない絶海の孤島であつたのだが、米国領に日の丸が翻つた事実にほとんどアメリカ国民が屈辱に打ち震えた。

日本軍の勢いが一気に失速したのは一九四二年六月から八月にかけての珊瑚海海戦、ミッドウェー海戦、ガダルカナル島の戦闘だつた。それまでほとんど無敵だつた日本海軍の機動部隊は二つの海戦で空母五隻を喪失し、ガダルカナル島の陸上戦では盧溝橋事件で名を馳せたカーネル・イチキを支隊長とする日本陸軍最強の一木支隊が全滅した。米豪連絡網を断つ目的でニューギニア攻略を企図した日本軍は、日本本土の二倍以上で、その面積のほとんどを人跡未踏のジャングルが覆うニューギニアに翻弄され、数万人の兵士、大量の軍事物資をむざむざと浪費していつた。戦争当初の日本軍は恐ろしいほどに強かつたが、手を広げ過ぎた。広大な太平洋に手広く兵力を分散する余力を、日本は持ち合わせてはいなかつた。日本軍を打ち負かしていく度に、アメリカ国内は沸きたち、戦意は高揚していつた。一九四三年四月、アドミラル・ヤマモトを殺害したことが報道されると、彼がパール・ハーバー奇襲の立役者だつたからアメリカ人は老人から子供までお祭り騒ぎをするように祝つた。

リチャードとポールは同じ歩兵部隊の軍医将校として配属されたが、訓練と言える訓練もせず、戦線からはるか遠い場所で過ごしていたので、今、戦争が行われていることを忘れてしまえた。二人にとって、カズと同じ肌や瞳を持つた人間が、鉄帽と小銃で武装し

て襲いかかってくる情景を思い浮かべることはできなかつた。金髪で無口で面白味も何もないドイツ人を相手にした方が、いくらか戦争を体験している気分に浸れるような気がしていた。二人が広い世界のどこで戦争の一端を担わされるのか、まだ情報のかけらさえ教えてもらえなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8577z/>

流れ星

2011年12月29日23時52分発行